

グローバル化に直面する合気道における 「文化ポリティクス」と「競技化」

—ノルベルト・エリアス「文明化過程論」の応用可能性—

村下 慣一

本稿の目的は、「グローバル化」と「競技化」という二つの課題に直面する合気道について、歴史社会学の泰斗ノルベルト・エリアスによる「文明化過程論」を導きの糸として考察し、課題の特性を把握し、その分析のための理論的視座を獲得することにある。そこで、本稿では、合気道がグローバル化するなかで起こる文化的実践における「意味」の問題に力点を置いて、合気道の現状整理と分析枠組みの探求を試みる。

本稿を通して明らかにしようとするのは、第一に、合気道のグローバル化を捉えるには、日本—西欧の関係論的枠組みが要求されること、第二に、合気道もまた近代スポーツと同様に、グローバルな世界システムの再編過程のなかで、文化の変容を捉えていく必要があることである。これらの解明によって、「グローバル」という、より広範な準拠枠のなかで「合気道」を再描画し、その実践のもつ今日的な「意味」を提示するものとする。そのために、以下の論点から、分析を試みる。

本稿の論点とは、第一に、合気道の世界的普及過程(とくに主流派と競技派の展開する国際化戦略)を、近代化論・グローバリゼーション論の文脈で描き直すこと、第二に、N・エリアス「文明化過程論」および山下高行「グローバル・スポーツ論」を参照枠とすることで、合気道がグローバル化するなかで持ち合わせる文化的実践の「意味」を見出すこと、この二点にある。

これらの論点に基づいて、第一に、合気会および昭道館合気道連盟の世界的普及過程を、蓄積された武道研究の枠組みのなかに位置づける。第二に、合気道におけるグローバル化の「アポリア」として、「非西洋」文化の世界的な還流過程を把握するための分析枠組みを検討する。第三に、本研究を通して確認された、合気道の現状を「グローバリゼーション」の文脈で再描画する。これらの作業を通して、「日本」の文化である合気道が、どのような意味解釈の文脈を通して、「非競技性」という意味を保持し、「人類」という類的認識へと向かいうる可能性を思想として内在化するように

なったのか、という合気道の文化実践意義の一端を探究したい。これらの分析視角に基づいて、以下のように考察を進める。

第一章では、合気道の現状整理を行い、現在、合気道の直面している課題を明らかにする。本章では、合気道の文化原理、植芝吉祥丸による文化ポリティクス、「合気道」のグローバル化、富木謙治による合気道の競技化という論点から、合気道を整理する。

第二章では、これまで蓄積されてきた武道研究に関する社会学的分析を整理し、合気道を描くための準拠枠を検討する。この際、エリアス学派による日本武道研究に関する詳細な検討を行い、その応用可能性について明らかにする。

第三章では、合気道がグローバル化に伴って直面してきた「アポリア」について、それを捉えるための社会学的な認識枠組みを模索する。とくに「非西洋」である「日本文化」が「グローバル化」するうえで起こる相克を動的に描くための可能性を探求する。最後に、これまでの議論を総括し、合気道における「グローバル化」と「競技化」の様相と展望について、エリアス学派の見地から理論的視座を提示する。とくに本研究を通して、先行研究の蓄積が進んでいる講道館柔道のグローバル化過程と、どのような類似性や差異がみえてくるのか、という日本武道のグローバル化の特徴と、合気道における歴史的個別性について言及する。

以上の考察を通して、本稿では、以下の四つの独自性を獲得するに至った。

第一に、合気道研究における社会学的な分析視角を開拓したのは、岩切朋彦やガルシア(Raúl Sánchez-García)であった。本稿では、先行研究で援用された方法論を精緻化し、より合気道に焦点化しながらも、マクロな社会構造との関係性のなかに位置づけるに至った。

第二に、これまで合気道における「相克」に対して、社会学的な分析視角から正面から描こうとする研究は、みられなかった。この未開拓領域について、エリアスの方法論を手がかりとして、検討を進めた。

第三に、本稿では、エリアス学派スポーツ研究においてトレンドとして定着した旧来の「文明化の過程」概念の援用法から距離をとり、山下高行らに基づいて、「サバイバル・ユニット(Überlebenseinheit)」概念を機軸に据えた。これによって、エリアスに内在的な「類的認識へと向かう統合の長期的過程」という規定的な方向性を見出すための「実証の場」として合気道を扱うことができるようになった。

第四に、合気道における「アポリア」に関する到達点である。「アポリア」とは、「非競技性」に固執する一方で、根拠となる思想を過度に神秘化し、界外に対して十分な理解に繋がる説明をできずにいたことである。これによって、合気道界の実践知的な思想は、現代社会に適合しているという主張を腑に落ちないものにしてきた。本稿は、「グローバリゼーション」と「文明化の過程」という主題のなかに「合気道」を位置づけることで、「コスモポリタニズム」へと向かいうる精神性に、今日的な実

2020 年度社会学研究科修士論文タイトル及び要旨

践「意味」が見出せることを明らかにした。